5. 令和７年度 学校評価報告書（実施結果）

	視点	4年間の目標 （令和６年度策定）	1年間の目標	取組の内容		校内評価
				具体的な方策	評価の観点	達成状況
1	教育課程 学習指導	①共生社会の実現にむけて、授業改善を中心とした教育活動を推進して課題解決力を育むとともに、個に応じた学習機会の拡大を促す。 ②部活動、生徒会活動を活性化させ、生徒の自主性、主体性を育む。	①確かな学力のさらなる定着と向上のため、個に応じた指導に加え、応用力・表現力を育てる授業づくりを進める。学び直しの成果を生かしながら、生徒が「わかる」「できる」を実感し、自ら学ぶ意欲につなげる授業を展開する。インクルーシブ教育の理念のもと、多様な学びのスタイルに対応した柔軟な学習支援を拡充する。 ②生徒会行事では、生徒自身が中心となって企画・運営・振り返りを行うプロセスを確立し、自治的な力を高める。部活動では、生徒の目標設定や活動の振り返りを重視し、主体性をさらに伸ばすとともに、学校内外に積極的に活動成果を発信し、地域とのつながりを意識した活性化を図る。	①習熟度別授業や補習により、個に応じた指導を実施する。 ・電子黒板などのICTを効果的に活用して「分かる喜び、できる喜び」を味わうことができるような授業の実践、また、生徒が ICT を利活用して自主的に学習する環境を整える。 ・ICT の利活用や TT による授業実践に関する校内研修を通して、実践力を身に付ける。 ・インクルーシブ教育の理念のもと、誰一人取り残されない学びの保障に取り組む。 ②生徒会本部役員の会議等を活用して生徒自身が行事を運営している実感を得られるように促す。部活動に関する情報を積極的に発信できる方法を工夫し、部活動の励みになるように努める。	①「生徒による授業評価」の結果により、個に応じた指導ができたか。 ・ICT を活用した授業が増加したか。 ・インクルーシブ教育を実践し、TT によるわかりやすい授業や個別のニーズに配慮した学習指導を実践したか。 ・電子黒板などの ICT を活用することができたか。 ・外部機関の講師を招聘し、教員の授業力向上に役立てられたか。 ②生徒たちが主体的に行事にかかわることができたか。 ・部活動に関する情報発信が活発化したか。	①習熟度別授業や補習等を実施し、個に応じた指導を実施できた。 ・電子黒板等の ICT の活用を進めるため講師を招き、授業力向上を進めることができた。 ・特別募集で入学した個々の生徒に対して、状況に応じて支援することができた。 ②生徒たちは学校行事等に積極的にかかわることができた。研究開発グループによる部活動のチラシも効果的だった。
2	生徒指導 ・支援	①基本的な生活習慣を確立し、ルールやマナーを自発的に守る生徒の育成を図る。 ②多様な生徒に対してそれぞれの課題に応じた支援体制を構築する。	① 規律意識の定着を図るとともに、生徒自身が集団の中での自分の役割や行動を自覚し、周囲と良好な関係を築けるよう、自律的な行動力の育成を目指す。予防的な指導に加え、生徒の内面に寄り添った対話的な関わりを通じて、問題行動の根本的な未然防止に取り組む。 ②生徒一人ひとりの変化を見逃さず、日常的な関わりを通して信頼関係を深めることで、より早期の課題発見と対応を可能にする。全職員が共通理解を持ち、チームとして機能する体制を強化する。 ・多様な背景や課題のある生徒への支援をさらに充実させるため、SC・SSW・SM など専門機関との連携を深め、組織的・継続的な教育相談体制を構築する。	①教職員間で生徒の情報共有を密に行い、生徒への積極的な働きかけにより、規律意識を高め、生徒の自律を促す。 ②生徒へのこまめな声かけや面談を通して心身の変化に気づき、困り感を聞き取る等、速やかな課題解決を図る。 ・担任、学年、SC、SSW、SM、相談コーディネーターとともに外部機関との連携を深め、生徒一人ひとりの課題に対応し、ケース会議を開く等、組織的な支援を行う。	①特別指導等の指導件数が減少したか。 ・学校や社会のルールを守って、モラルやマナーの向上が見られたか。 ②SC、SSW、SM と生徒、保護者との面談回数は増加したか。 ・外部の相談機関等と連携し、効果的な生徒支援ができたか。 ・ケース会議を適切に開催し迅速に対応できたか。	①特別指導の指導件数は増加した。 ・「交通安全教室」や「SNS トラブル防止教室」を実施した。 ②支援の必要な生徒を SC や SSW につなげることができた。 ・児童相談所や警察等と連携し、適切に対応できた。 ・必要に応じて、支援の必要な生徒の情報を共有し、支援方法や配慮について検討し対応することができた。

校内評価	学校関係者評価	総合評価（3月27日実施）	
課題・改善方策等	（3月14日実施）	成果と課題	改善方策等
①個による学力の開きが大きくなり、引き続き個に応じた指導を継続する必要がある。 ・ICT を活用した授業を増やして行く努力が必要である。 ・職員全体による支援体制を更に進めていくことが必要である。 ②次年度の学校行事について、生徒の要望をどのくらい受け入れられるか検討していく。部活動の広報を強化し、活動の活発化を推進していく。	①インクルーシブ教育実践推進校として、クリエイティブにインクルーシブ教育の実践や習熟度別学習等で「個別最適な学び」の実践に取り組まれたことを評価する。 ・ICTの活用については、電子黒板等の活用も今後継続してほしい。 ②部活動の大会開催日をマチコミやホームページに事前告知して応援者増加が活性化につながると思う。	①少人数授業や習熟度別授業、補習等を実施し、個に応じた指導を実施できた。 ・電子黒板等の ICT の活用を進めるため研修等を重ね、授業力向上を進めることができた。 ・インクルーシブ教育実践に係る、「共生社会」の実現に向けて、きめ細やかな対応を継続して取り組む必要がある。 ②生徒たちは学校行事等に積極的にかかわることができた。生徒会生徒が学校説明会を運営したのは効果的だった。	①「学びなおし」の視点で、生徒が達成感を感じられる授業を実践するための授業研修を行う。 ・ICT を活用した授業研修を行い、生徒がより分かりやすい授業を実践していく。 ②部活動の活動状況をホームページや学校説明会等で積極的に発信し、学校生活の活性化を図る。 ・学校行事や教育活動を通して、生徒の自己効力感を向上させる。
①各学年において、一人ひとりの生徒の状況を把握し、指導方法について十分に検討したうえで適切に対応することが必要である。 ②生徒からの相談やアンケートなどから、困難を抱える生徒を把握し、関係の教職員・SC・SSW と情報共有を行う。 ・生徒の状況によって、医療や福祉などの外部機関に適切につなげていける体制づくりをより一層進める。	①1年生から3年生までの積み重ねにより、社会で生活するための知識やスキルが身に付くものと考える。引き続き、ご指導およびご支援をお願いする。 ②生徒一人ひとりについて担任、学年、SC、SSW、SM、相談コーディネーターとともに外部機関とも連携を深めるというのは、不可能と思われるが、連携意識をもって、メリハリをつけた対応で、頑張っていただきたい。	①ルールやマナーを守らせることは社会全体の課題であり、高校の役割は大きい。今後も継続して、モラルの定着に向けて指導を行う必要がある。 ・交通安全教室等を通して、登下校時の自転車指導を強化する必要がある。 ②SC や SSW、外部機関と連携を図りながら、課題を抱える生徒の支援を行った。 ・今後も、生徒一人ひとりの特性を見極め、丁寧に対応していく必要がある。	①特別指導等の指導件数の減少を目指し、地域と連携を図りながら、社会人としての礼儀やマナー教育に取り組む。 ・自転車の乗り方や危険性を理解させ、登下校時のマナーの啓発活動を行う。 ②生徒が充実した学校生活を送れるよう、引き続き、一人ひとりの生徒の課題に応じた支援を行っていく。

	視点	4年間の目標 （令和6年度策定）	1年間の目標	取組の内容		校内評価
				具体的な方策	評価の観点	達成状況
3	進路指導・支援	①一人ひとりのキャリア発達のために、社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力や態度を育てる。 ②自己理解の深化と自己受容 や勤労感、職業観の確立を目指し、進路指導の充実を図る。	①生徒一人ひとりが自身の強みや可能性をより深く理解し、将来の目標に向けて主体的に取り組めるよう多面的な支援を行う。進路希望の実現に向けて、個々の適性や興味に応じた体験的学習や多様な選択肢の提示を通して、より実践的かつ汎用性のある進路支援を行う。 ②インクルーシブ教育実践推進校として、多様な生徒のニーズに対応した進路支援体制をさらに強化し、継続的かつ段階的な情報提供と個別支援を計画的に実施する。外部機関や地域との連携を深め、社会的・職業的自立を見据えたキャリア形成を支援する。	①各学年の進路ガイダンスや探究学習等において体験的活動を取り入れる。 ・職業や上級学校等において必要となる知識・技能等を知る機会を設定し、具体的に将来の自分をイメージできる活動を展開する。 ・「朝読書」及び「新聞を読む」等を通して読解力の養成に努めるとともに、社会の急激な変化を理解し、汎用性の高い力の育成に努める。 ②「職業と生活Ⅰ、Ⅱ」を通して、将来に向けたキャリア形成を支援し、主体性のある行動変容を促す。	①各学年において進路体験的学習を取り入れたか。 ・夏季休業等を活用してインターンシップを実施し、フィードバックを行ったか。 ・「朝読書・新聞を読む」の活動を通して、生徒の視野が広がり、多面的な見方・考え方ができるようになったか。 ②「職業と生活Ⅰ、Ⅱ」を通して社会的・職業的自立について意識や行動の変容が認められたか。	①年間に基づいて各学年進路ガイダンスを実施できた。 ・将来の職業について学習する機会を豊富に設け、進路意識の向上に努めた。 ・夏季休業を活用して、26 名の生徒が（1 年生～3年生）インターンシップに意欲的に参加した。 ②一人ひとりがソーシャルスキル等を身に付ける授業展開ができた。
4	地域等との協働	①地域・保護者等との連携・協働を推進し、信頼される学校づくりに取り組む。	①生徒の主体的な活動や学びの成果を多様な手段で継続的に発信し、地域や保護者との双方向のコミュニケーションを深めることで、本校の教育活動への理解と信頼をさらに高める。広報の質と範囲を拡充し、開かれた学校づくりを推進する。 ②インクルーシブ教育実践推進校としての取り組みを、説明会や見学会、情報発信を通して継続的かつ具体的に伝えることで、学校の特色や教育理念を広く共有し、地域や関係機関との連携基盤をより強固なものとする。 ③PTA 活動や地域ボランティアとの協働の機会をさらに広げ、生徒が地域社会の一員として関わる実体験を重ねる中で、社会性や責任感、共に生きる力を育む。地域とのつながりを生かした教育活動を推進し、共生社会の形成に寄与する。	①ホームページの充実を図り、夏の学校見学会と10月、11月の学校説明会で本校の魅力や特色を積極的に行う。 ・ホームページで行事などの記事を載せ、生徒がどのような学校生活を送っているのかを感じられるように充実を図る。また、学校説明会等で、本校の魅力や特色を発信する。 ②連携生等の進路実現に向けた支援の1つとして職場体験（インターシップ）を設定し、自立と自律の醸成に努める。 ・企業や外部の教育機関との連携により実践的かつ今日的な情報を収集し、生徒の進路支援に生かす。 ③清掃活動や体育祭、文化祭などを通して、地域、生徒、保護者が一緒に活動する機会を設ける。また、地域の企業や団体と協力して、環境保護や地域振興に関するプロジェクトを行う。	①本校の魅力や特色を適切に、定期的に発信することができたか。 ・卒業生や大学・専門学校・職業人を招聘し、必要となる情報や知識を提供したか。 ②個別指導計画に基づいた支援について内容を精選し職業等の支援につなげたか。 ③生徒が活動後に報告書を作成し、学んだことや感じたことを共有することで、共に生きる力の育成を確認する。	①夏の学校見学会は、9日間行い、394 名の参加があった。10 月、11 月の学校説明会には 185 名、190 名の参加があった。参加者のアンケートを見ると、良い評価が多かった。適切に本校を広報することができた。 ②説明会等で、インクルーシブ教育について具体的に発信することができた。 ③PTAとともに、文化祭、体育祭ドリンクサービスなどを実施した。 ・地域の清掃活動に参加し、積極的な地域活動に貢献することができた。
5	学校管理学校運営	①学校運営に関して保護者や地域住民等の意向を反映して協力を得るとともに、学校安全管理を組織的に推進する。 ②事故・不祥事防止対策を徹底する。 ③働き方改革、ICT 利活用等により教育環境の整備を進め、円滑な学校運営を実施する。	①地域と連携した防災訓練の質を高めるとともに、生徒・職員それぞれが自ら考え行動できる「実効性のある防災教育」を展開する。防災研修やシミュレーションを通じて、災害時における役割意識と対応力を一層強化し、地域防災の中核を担う体制を築く。 ②成績処理、個人情報の取り扱い、体罰・事故等の未然防止について、教職員一人ひとりが規範意識と責任感を持って行動する体制を徹底する。 ・私費会計処理は、業務の分担や手順の明確化を図り、効率的かつ透明性の高い運用を実現する。 ③教育活動全体におけるICTの活用を教職員各自が「自分ごと」として捉え、日常業務の効率化・省力化に取り組むことで、継続的な働き方改革を推進する。 ・教職員が自ら業務の見直しに主体的に取り組み、「やめるべきこと」「簡略化できること」を明確にしてスクラップ&ビルドを実行に移す体制を確立する。	①地域の消防署と連携し、実際の災害を想定した合同防災訓練を実施する。また、生徒と職員が参加する防災ワークショップを開催し、災害時の対応方法や避難経路の確認を行う。 ②会計処理の全体フローを共有し、各担当者の役割と責任を明確にし、業務の重複や漏れを防ぐ。 ・不祥事防止研修を中心として組織的な取組みを強化し、職員一人ひとりの当事者意識のさらなる向上に努める。 ③年間の企画会議・職員会議の年度当初の日程設定、グループ・学年の会議の回数削減、勤務時間を越えての会議延長の廃止、業務分担の改善を徹底していく。	①参加者からのフィードバックを収集して訓練の質を評価する。また、訓練後に生徒や職員に対してアンケートを実施し、理解度や自信の向上を評価する。 ②外部監査を依頼し、第三者の視点から透明性と効率性を評価する。 職員一人ひとりが当事者意識を持ち不祥事防止に取組み、生徒・保護者・県民からの信頼を得られる学校づくりを推進できたか。 ③会議の減少や効率を図ることで、業務改善を行ことができたか。	①緊急参集訓練と地域防災スクールを実施し、災害時の対応方法や避難時の参集について確認できた。 ②私費については、年間を通し、適切な執行を行うことができた。 ③ロイロノートを導入後にロイロノートの効果的な使い方の職員研修を行い、「確かな学び」の向上につながった。 ・年間の企画会議・職員会議の日程が早めに掲示されることで業務の予定を立てることができた。各グループ会議時間を業務時間内に終える意識を持ち、各グループが業務の見通しを立てて業務を遂行した。

校内評価	学校関係者評価	総合評価（3月27日実施）	
課題・改善方策等	（3月14日実施）	成果と課題	改善方策等
①将来の職業等について、生徒一人ひとりが自分ごととしてとらえる指導を具体的に取り入れる必要がある。 ・インターンシップの参加者人数を増やすことができるか、が課題である。（30名以上） ②社会の中で自己の役割について体験等を通して学ぶ機会を一層すすめる。	①3年間の継続した指導が実り、生徒一人ひとりのキャリア発達が進みつつあることが垣間見れる。学習指導とのリンクを図りながら、引き続き、指導をお願いしたい。 ②近隣の高齢者福祉施設において社会学習、職業学習の場として活用するとともに、進路先として、施設見学等の実施することで、地域連携の強化にもつながると考える。	①年間に基づいて各学年進路ガイダンスを実施することにより生徒たちのキャリアデザインをより具体化することができた。 ②生徒が自分の将来を考え主体的に進路選択ができるようになることは、とても重要である。そのための指導に計画的な進路指導を行う必要がある。	①3年間を見通すキャリアデザインを目指し、保護者と連携を図りながら、丁寧な進路支援をする。 ・研修等を利用して、時代に合った教員の進路指導・支援スキルの向上を図る。 ②生徒・保護者に定期的に情報を提供し、一人ひとりに適した進路実現を目指す。
①ホームページや、見学会、説明会を通して、志願者が増えるように、それぞれの充実を図りたい。本校の魅力や特色を誰に対してもわかりやすくしていきたい。 ②ミスマッチを防ぐため、本校の魅力や特色の積極的な発信を続けていきたい。 ③地域とのつながりを意識して、積極的な連携に今後も努める。	①学校見学が高校生活を理解する良い機会となるほか、ホームページに詳細が記載されていることでより理解を深めることができるので、今後も充実したコンテンツをお願いしたい。また、説明会を通してインクルーシブ教育の具体的な取組み内容を理解できた。 ③地域等との協働は、高齢者福祉にこそ強く求められている。近隣の高齢化も進んでおり高齢者福祉施設が連携し、地域貢献、社会貢献の実践につなげていくことも、一つの選択肢であると考える。	①夏の学校説明会を含め、計画的に中学生に学校概要や生徒の活動、インクルーシブ教育実践推進校のアピールをすることができた。 ・地域の清掃活動やイベントに生徒が参加するなど、PTAと連携を図りながら、地域活動に貢献することができた。 ・近隣の高齢者福祉施設と連携を図り、生徒の状況やインクルーシブ教育についての理解を深めることができた。	①12月に学校説明会を計画するなどさらに、より分かりやすい学校説明会の実施や、HPを充実させ、本校の特色を積極的に発信していく。 ②学校の情報発信の手段を見直し、インクルーシブ教育への理解を深める工夫をする。 ③PTAと連携を図りながら生徒のボランティア活動への参加の機会を増やしていく。
①今後も情報の更新に努め、各種訓練に生かしていく。 ② 次年度も業務アシスタントなどと業務を分担し速やかな会計処理に努める。 ・県財務事務調査で指摘された改善点を、教職員に周知し至急対応する。 ③ICT活用に必要な研修があれば、積極的に研修会を開いていく。 ・様々な会議の効率化を図りながら業務改善を引き続き継続する。 ・不祥事防止は恒常的に継続する案件なので、今後も職員全員で取り組む必要がある。	①学校の安心安全は最優先事項である。生徒さんのみならず、先生方も過ごしやすい場となるよう、期待する。 ・緊急参集訓練や地域防災スクールなど開催いただいて生徒が体験できるのは良い取り組みである。 ③教職員の働き方改革について取り組みを進められていることが理解できた。改革は教職員自らが自分事として意識を変えていく必要があるので、そうした意識改革を図りながら、今後も生徒と向き合う時間の確保のため、取り組みを進めてほしい。	①緊急参集訓練と地域防災スクールを実施することで生徒の防災意識の向上や近隣の学校や施設と、今後の災害に向けて連携を図ることができた。 ②成績処理や3年生進路関係資料等においては、事前の作業手順の確認を徹底し、事故防止に努めることができた。 ③Teams や ICT 活用を促進し、会議や会議資料を減らすことで、業務改善を進めることができた。	①災害時における危険を認識し、日常的な備えを行う。また、危機管理マニュアル等の見直しを図る ②成績処理や3年生進路作成資料等においては、事前にフローチャート化した作業手順で確認することを徹底し、事故防止に努める。 ③ロイロノートの導入や採点システムを促進することで、引き続き、業務の見直しとスクラップ＆ビルドを進め、働き方改革に努める。